
ばらとみつばち

宵山 菖子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ぱらとみつばち

【著者】

N1489E

【作者名】

宵山 菊子

【あらすじ】

ぱらとみつばちを題材にした童話です。

「あ、アーリー、ぱりが一つん咲いておつました。」

モードのよひにまつかな色で、みすみすしゃらかにかがやいた、
とトモトモかわいへしこぱりでした。

あるとあ、アーリーマシがぱりをみかけていひここました。

「あ、なんとあまこあまこみつの香つがするんだひへ。 ねこぱり
よ、せくこやのおせんのみつを分けてくれないか?」

あねと、せりせりひじつとせせんでここました。

「ええ、やわらかですとも。 あ、じりじりたつぱつたつぱつもつてこ
つてくだせこな」

アーリーマシは、しめたとばかつにわらわらこわこわとばなびのくわを
登のへとつめました。

といひが、ぱるのくわにまどかがびひじつあったのです。

これを見たアーリーマシは顔をまつわるこじて、いひここました。

「やれやれ、れのくわのくわのくわむつかしこ。 あ、せんねんだがあ
れいぬとこりゆつかこ。」

やつて、ひとじりとひへ、へ来た道を帰つて行つたのであります
した。

ばらばたいそつがつかりして、しょんぼりとかたをおとしました。

次の日、ばらのもとへ何百匹ものありたちがおとずれました。

「アブラムシのだんながらきいたのだが、たしかにあまいあまいかおりがする。これはさぞおいしいみつがとれるだろう。なあ、ばらよ。われらの女王のためにみつをわけてくれないか？」

かねてから、昨日よつもれいれいとした顔で答えました。

「ええ、もちろんよ。ぜひもつていつてくださいな」

する」とありたまひろひじんで、さつそく準備をはじめました。

「ふむ、アブラムシのだんなからきいていたが、こいつはたいせつやつかいなとげとげだ。やー、一番部隊、準備はじめー！」

隊長ありに言われ、一番部隊のありたち五匹はすぐさまどげをのぼりはじめ、ぐるにしがみついてありのせじいをつくりました。

「つぎは一番部隊いけい！」

一番部隊のありぬけは、くわいしがみついていぬまじ「あつたちのうえをのせつて、一番部隊あつのはじ「の上にまたはじ「をつくつました。

「つわせ二番船隊、いかー！」

三番部隊のあり田四郎は、一番部隊あつのはじの上に立つた一番

部隊は「」の上を歩こんで、ゆつやくせりのせなびりたてりかやくこ
ました。

「あらあら、ずこぶんとたこへんだったのな。」

ばらがきよときよと辺つを見回しながら「」、あつたちは
にいつ笑つて答えました。

「こえいえ、これがせくらの「」とです。」

せくらじめのあこだ、あつたけはかわるがわるせくらのみつを
せくらでこつたのでした。

れこらの一滴をせくらむねる、あつの隊長はこまつた。

「こやこやどりもあつがとく。」れでせくらの「」とはおわつまし
た。」

そつしてありたちは、来た時よりもずつと少ない数で帰つていった
のです。

ありたちの行列を見送つたばらがふう、とため息をついてばらが足
元を見下すと、れにせくらのとさとげにひつかつた一番部隊
のあり百四と、一一番部隊のあり五十四の死骸が転がっていました。

ばらは、それを見てびくべくして辺を出しました。

「ああ、ああ、わたしのとさとげのせこなのね、」あんなたこ、
めんなれこ。」

ぱりは泣きました。なぜでしょうか。なぜだか涙がとまつませんでした。

「わたしのどなた、むしをまじわすいけないものなのだわ。ああ、なんてわたしは罪深い。」

ぱりは、自分のどなたのために泣きました。

なんて悲しき涙でしょう。その涙は、露となつてぽたつと画面におひりで、すぐに逝ってしまいました。

何日かすると、一月のまちがふうとぱりのじゆくやつてきました。
た。

「やあやあここ香つがするね。あなたのまのじゆくだね。」

「あらはうさん。でもだめよ。わたし、もひ始めたのよ。だれにもわたしのまつはあげないって」

「おやおやかしなことを言ひ。僕がまつをもひえなかつたら、いつたじいじいやつてきみは種をまくんだい？」

「だつてわたしがまつをあげるなり、あなたはわたしのどなたかにさされて傷つくかもしれないのよ。わたしゃんなことたえられないとわ

するとはちはいじわるな顔で笑いました。

「エーハシさんなりとをこののや。おみせまい。せくはせむ。まつたく関係ないふたりだらう。エーハシおみがかなしまなけりやならないんだい？」

ぱりぱりめつたよひ止首を傾げました。

「だつてわたしのとげとげで、このあいだたくさんありさんたちが死んでいったのよ。わたしの足もといつぱいのありが死んでいたのに。そのときわたしはかなしくなつたの。あんな思いはもつたくさん。」

「へえ、それで？ ありたちは女王のために死んでいったのに。きみのどげがいくらありを死なせようとも、それはきみじやなくありの女王のせいじやないのかい？」

「あら、ずいぶんなことを云うのね。ありの女王はわたしのみつがほしかつただけなのよ。ありたちはそんな女王のためにみつをとびけたかつただけじゃない。」

「やうだね。それはきみがみつをもつていつてせことのとおなじよ
うなもんだ。」

「やつよ、女王はねわぬくないじやない。」

「じゃ、きみもわるくないじゃない。女王はみつをほしがつて、きみはみつをもらつてほしかつた。ありたちは女王のために働きたかった。そしてすべての願いは叶つたんだよ。それで、なぜきみはありたちが死んで悲しいと思つたんだい？」

ほらほますますいよいよてしまいました。

「だつて……それは……ありたちが、」

「あいつたちは使命をまつとつしたのや。なぜあみはそれを悲しむひつよひがあるんだい」

「ありたちが、わたしのとげとげで死んだからよ。」

そこまでいいたのは、にんまりわらっていきました。

「ねえ、ばら。きみは自分のどげが憎いかい？みつをもつていかせないための、むしをよせつけないための自分のどげが、そんなに憎いのかい？ちがうだろ？」

きみはただ、『じじまんのとげのせいにしてこるだけなんだ。そうやつで、きみは自分のみつがどれだけあまくて、おこしくて、かちがあるものかをたしかめてはよろこんでいるんだよ。やつ、『わたしのみつがほしいなら、『のとげとげを乗り越えてきなせこよ。そうしなければ簡単にみつはあげないわー！』ってね。』

「ちがう、ちがう！ なんてあなたはいじがわるいのかしら。わたしはあなたを傷つけるかと思ってしんぱいだつたのに！ いやよ、いや。何といじわる！ あなたになんかわたしのみつはあげないわ。あ

「ひへこつひめひだい！」

ふふつとせりわらじこました。

「ねえ、せり。おみせじあまやつり、おこしやつり、ぬくに花ははじめてだよ。おみときたら、ぼくのこいつとをまるでしゃがめやしない。ほかの花は、ぼくがなんともこわなこいつをまつをせしはじくるんだもの。」

「せんないことこつたつて、あげないわ。せりこ、あなたはせりこよ。よそへこつてよそのみつをもらつてかえればいいでしょ。」

「せりが、なんだかわからなこばずかしさとかなしあとで、ぽろぽろぽろだをじせしながらここました。」

「せり、あつちくおゆき。わたしさもつつかれたのよ。せり口がくれて、星のつゆがそらをぬらす時間な。おかげりなやこよ、ねえせりせり。」

はちみそれでもこせりひ、ここました。

「せおがみつをくれるなら、こつだつてこりこりきて話相手になつてあげる。ねえ、せり。あしたもぼくはこりこり来るよ。おみのみつと、おみにあこにね。」

はちみふうん、と深んで行き、やがてすがたはみえなくなりました。

「ああ、つかれたわ。ゆつむむうなれせ……」

やうこつて、せりがねむつひせました。

つもの田、おひれましまだおきたばかりの時間の1週間でした。

ひとつの一imensenが、ばかりをみつけたのです。

「おやまあこんなとこありますかな？」「それは私の家のげんかんをかれるのにちょうどいい。」

「一imensenは、今こいつはみだせりのへかをぱりとあつねとしました。

ぱりぱりくつしましたが、いたくもなこともあつませんでした。じぱりくわると一imensenは、水を入れた、ながほそくて透明ないれものじぱりを入れました。

「きれいだね。」

「きれいだね。」

「一imensenは、一imensenたちは口々にこいました。

「こんなきれいなばかり見たことがない。」

ぱりぱりこわれたたびに、くわべつたくわれこわらこなつました。

ああ、わたしはきれいになね。とげとげがあつたつて、みつをあげられなくたつて、いいの。わたしはきれいだからほめられているのだわ。わたしがきれいだから。

二ングンたちは、わたしがきれいになねらであるだけで、ほめてくれるのだわ。なんてなんてうれしいことかじり。

ばらばら、うれしくてうれしくてふるえました。そうしてなおもきれいにならうと、水にひたつた足元からぐんぐんとえこよつぶんを吸い上げました。

その時にせ、ばらばら昨日のまちのことになんてすっかり忘れてしまつてこました。

それから向日かたちました。ばらばらこきん、元氣がありません。じまんのもえるような花びらは黒ずんできましたし、なんだかこじも曲がってきたみたいです。

「おかしいわね。なんだかわこきん元氣がでないわ。まどからおひさまが照つていらしていの。葉っぱもしゅんとしてしまつて。」

「まあ、枯れよつとしていました。土から吸こ上げられたるべくよつと二ヶ所が毎日とりかえる水のえいよつでせ、やつぱり土のまつぱりがいいのです。

「ああ。辛いわ。苦しいわ。じつじたのかじら。」

「ばらが二ヶ所に苦しみを訴えまつとじても、じつじたるまつせん。二ヶ所はあいかわらす、ぱりを覗く、あれこだね、とこりぱかりです。

「やうが、わたしはいじり枯れてしまつたのね。でもいにわ。わたしはいじんなにきれいだつてほめられたのだから。きれいだつてほめられて、わたしは満足してゐるよ。」

「ぱりせ自分で分りきい聞かせましたが、なんだかさみしこきもつていつぱいになりました。

「やあぱり。おまえはあいかわらすきれいだね。けれども、前に会つたときよか、こくぶんか元気がないみたいだ。」

びつくりしてぱらはふりかえつました。すると、やじじまこつがてあつたはちがいたのです。

「まつれど、じつじたるまつせんといふてゐるのへ。

はちがふん、と呟をならして言いました。

「いのまえきみに会つたとき、あくせ『明日あつて行く』といったらう? だのに、きみはもうあの場所にはいなかつたじやないか。これでもすこぶん探ししたんだ。」

セツコ「ほほえむばかり」、せつは弱弱しく笑いかけました。

「わらったわね。でも「めんなれこ、まちさん。わたし…」

「おや。まだきみは虫にみつをあげないつもりかい? それは花の本分をまつとうしてこないことになるじゃないか。きみは、なんだつてそんなにきれいに咲いてこるのや。」

そうはちに問われてばらははっとしました。わらです。いくらきれいだきれいだと言われても。一ソゲンにきれいだといわれるためにはらがきれいなのではないのです。

それから、まちを見て気がつきました。まちは、羽がぼろぼろだつたのです。足も一本もげていました。それでもまちは、ここに元氣よく笑つてこます。

「… そうね、そうだわ。わたしはみつを虫たちにあげるために咲いたのね。わたしのみつで、すこしでも長く虫たちが生きのびられるよ。ああ」「めんなれこ、まちさん。

わたしがもうちょっととつらつで、もうちょっとと考えが足ついていたら、あなたは羽をそんなにぼろぼろしないで足もつぱにころつていたのでしょ。ね。」

まちが、おじりこで自分の体をきよとさせとと見まわしました。

「ああ、これかい。べつに気こじなくつたつていいんだよ。ぼくは皆女王のためにこうなるのや。それこ、どのみち僕らはもうすぐ死ぬからね。冬が近いんだ。」

それをやめて、せりは懲しくなりました。

「死んでしまつてかわいがり。」

「ほつらと眞葉をもらしたばらは、はがねておました。

「かわいがりなんかじゃなこ。僕らはこゝしょうさんめこまちの本分をまつとうして、こゝしょうさんめこ生きたから。」

「せりです。はちまつしょうさんめいみつを運びました。はたらきました。それはとても満足なことで、何より樂しことでした。

「…わたしまは、ばらの本分をまつとうせずに生きてきたのね。ただきれいだ、きれいだつて言われて喜んで。それだけだったの。」

「あみしありは眞ておした。なんだか、はりがとてもやうやうとかがやいて見えたのです。

「ねえ、ばら。あみしありくしご。花の本分はみつを虫にわけあたえることだけれども、せりはきれいであることも本分なのじやないかとほくは思つんだ。

「ばらがきれいじやなかつたら、虫はきみみたいなどげとがした花なんて見向きもしないもの。」

それを聞いたばらは、少しばかりうれしかつて笑いました。

「あらがとうせんさん。やうこつてもらうとうれしこわ。じやあ、わたしもこゝさんは花の本分をまつとうしてみよがしら。ね、みつ

をもつてこつてぐだわらなー?」

「おや、ばかに素直じやないか。びりしたんだい。」

「ぱいせ、やつぱつ弱弱しく笑いながら言いました。

「いのまほ、花の本分をまつとつしないで枯れるのが少しこやになつたのよ。」

はちは、うんうんとうなずきました。

「なるほどね。きみが、わつきから元氣がなさそうだったのは、もう枯れるからなんだね。」

ひつひつと笑ひたはせ、ふうんと笑をばたつかせ、ぜまいの花びらに乗りました。

「では、わらひてゆくよ。ああ、なんだい。とつてもあまこあまいにおいじやないか。今までらつてきた、どんな花のみつよりかかぐわしこ。」

「ふふふ。ありがとうはせさん。」

ぱらぱくすくす笑いました。やつぱつ、弱弱しくです。そんなぱらに、はりは語りかけました。

「ぱい。きみはこれから枯れるし、ぼくは冬の寒さで死んでしまつ。だからこれでお別れかもしけないけれど、ぼくは今日きみに会えてよかつたよ。」

やつはかがこいつ、ぜりせりおもどのの笑顔よつも美しへ、笑いました。

「わたしもよ、せむわん。おかげで、わたしは花の本分をまつといふかるいじができたわ。」

「ねえこわせだよ。それじゃあね、ぜり。ここ夢を。」

「わよひなひ、せむわん。」

「ふうん、じめちは飛び去つてこきました。いい夢を。やつはれたのははじめてです。」

「ここ夢を。なんてすてきな言葉でしょ。ぜりせ、じれから数えるほどであのう夜が待けどおしくなつました。言葉のとおりに、今夜からここ夢を見られそつな気がします。」

つわの田の朝のじとじです。ぜらが田観めんとはあつませんでした。

昨日の夜に、ぜりが枯れやつた」といふがつこた二ンゲンが、ぜりをドリーフラワーにしたからです。

木のつるやこうこうなかぞりものを輪つかにしたもののまんなかに、みじとなばらがかざられていきました。それは、あぐぬの口の二ングンたちのお祭りのためのものです。

せん、ヒーハゲンがせんせんに輪つかねをへと、せんせんがせんせんをめました。

「やあばら。なんだかかわったところにいるじゃないか。からからに乾燥して、それでもきみはうつくしいんだね。」

ばらば答えません。 答えるはずはあつません。 せひもせんなりせ
分かつてこます。

「『まー』。もみせやうやつで、死んでまで『まー』の本分をまつとうして
い。す『まー』じやないか。」

はちはそれっきり、動かなくなりました。どうやら、眠ってしまったようですね。

（後書き）

読んでくださってありがとうございました。

この話は、僕が中学生の時に思いついたものです。

思いついた当初は、実は童話単品ではなく当時書いていたノワールまがいの小説の付随作品でした。でも、単品としていつか出してみたかったという想にもあって今回書いてみました。

童話は難しいですね。ビニまでが平仮名でビニまでが漢字で良いのか、この境界線が難しいです。

この話にかけた時間は、一週間くらいでしょうか。前半と後半を書くのに中途半端な時間が空いてしまいましたので、それ以上かけたのかもしれませんのが分かりません。暫定的に一週間とすることにします。

この話は、当時バラのモチーフが好きすぎて薔薇に狂っていた馬鹿な僕のレクリエムとして執筆します。

「めんなさい格好よく言つてみたかったのですがいまいちでしたね。恥ずかしい。

童話つて、難しい。

今回はそれを思い知られました。

4月 某日 午前0時42分

宵之口 閻太郎

こんな遅くに何やつている。自分。

とにかく、この話に当たはまるカテゴリがあんまりないのは何故。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1489e/>

ばらとみつばち

2010年10月12日21時03分発行